
コンピュータさまさま.....

DirtyTom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンピュータさまさま……

【Nコード】

N3673F

【作者名】

DirtyTom

【あらすじ】

自律思考型PCは誰でも手軽に購入できるサイズと価格帯で、一般家庭へも急速に普及していった。まったく便利な世の中になったものだ……

おや、もうこんな時間か。急がなければ。

買い物帰りにふと時計に目をやると、思ったより時が経っていることに気づいた。

早く帰らなくちゃな。あいつは時間にするさいから。

あいつというのは私の同居人にして、仕事面の相棒でもある『アダム』のことだった。そもそも今日の買い物というのもそのアダムに頼まれて、現在ベストセラーを続けている作家の本を買いに行っていたのである。

「ただいま、アダム」

「随分と遅かったな、コイチ」

部屋に入るなり、おかえりの声もなしにアダムは私に文句を言いはじめた。

「約束の時間を十一分三十七秒も過ぎているぞ」

「すまんすまん、意外と手間取ってね」

「まったく君はルーズでいかん。以後気をつけろよ」

「ああ、今度からきちんと時間を守るよ」

頼んでおいてこの態度だ。

いささか腹は立つたが、へたに機嫌を損ねて仕事に支障をきたすのもバカらしいので、とりあえず低姿勢で謝っておくことにした。「そんなことより」アダムがせかすように言う。「頼んでおいたものは」

「ああ、そうだったな。今すぐ渡すよ」

私はポケットに入れておいた小さな紙袋から、カードを一枚取り出してアダムに手渡した。いや、くわえさせたとでも言うべきか。するとカードはアダムの中に吸い込まれるように入っていた。

そう、アダムはコンピュータなのだ。

だから彼が時間に正確なのは当然であり、自分で本を買いに行けないのも仕方がないことなのである。

しかし、ただのコンピュータではない。難しい言い方はよくわからないが、自らの頭脳で考え、思った通りに話すことが出来る。要するに意志を持つコンピュータなのだ。

第 世代の完全自律思考型システム搭載に伴い、小型化、集積化、大幅なコストダウンを実現。ビジネスパートナーとして、孤独な階層の話し相手として、はたまた友人やペットとして、自律思考型PCは誰でも手軽に購入できるサイズと価格帯で、一般家庭へも急速に普及していった。

テクノロジーの進歩とは素晴らしいものだ。コンピュータも見事に進化し、旧世代との世代交代を果たしたといったところか。

そして、単に思考能力を持つというだけではなく、彼らは仕事面でも実によくやってくれる。相棒としては申し分なかった。

ただいろいろなことを考え出すのはいいのだが、それに加えて知識欲のほうも貪欲であり、そのために常に新しい知識を供給し続けなければならなかった。

まあ、パートナーである以上、嫌とも言えないのだが……

モニタ画面がめまぐるしく流れたかと思うや、またすぐにもとの表示に戻った。

「もう読んでしまったのかい」

「ああ」一呼吸おいてアダムが言う。「なかなか面白かった。また頼むよ」

「ああ、いいとも」

さすがにコンピュータだけに、本にすると一冊分の容量も瞬く間に読み終えてしまう。

「それにしても割りが合わないな。僕があんなに苦労して買い求めてきたものを、君は一瞬にして読んでしまう。これでは体がいくつあっても足りやしない」

「体があるだけ僕らよりマシだろ」

「そりゃ、まあね……」

ブックカードはテレビやラジオなどの情報とは違って、わざわざ一枚ずつ買い求めなければならない。何故なら人間で言うところの立ち読みにあたる感覚で、彼らはそのすべてを読みつくし、そしていつまでも忘れることがないからである。これでは作家としても商売があがったりなので、仕方がないことなのだ。

ダウンロードも禁止だ。ネットに繋がった状態でブックカードにアクセスすると警告を受け、漏洩が明らかになれば、そのコンピュータは当局から強制的に自律回路を抹消される。当然所有者も罰を受けるわけだが、何より彼らにとってのそれは人間で言うところの死に値するわけだから、利口な彼らがそんな迂闊なことをするはずもない。

まあ、中にはそれを承知で悪さする輩もいることにはいるが、そういうところは人間もコンピュータも同じか……

「さてと」頃合いを見計らって、私はおそろおそろアダムに切り出した。「本も読んだことだし、そろそろ仕事に取りかかりてもらえないかな」

「ああ、いいとも」

知識欲を満たしたせい、アダムはしごく機嫌がいい様子だった。「それで今回の仕事は」

待つてましたとばかりに、私はスケジュール帳を取り出した。

「ええとだね、今月は月刊ABC時代と小説QRS、XYZ読本に、あとアルファベット出版から書き下ろしを一本頼まれている」

「それだけかい」

「まだあと何本かは入っているけれど、とりあえずそれだけやってくれ」

「OK、君が寝ている間にやっておくよ」

「頼むよ、アダム」

アダムは早速仕事に取りかかり始めた。

そう、何を隠そう、実は私も小説家なのである。とは言っても仕事はすべてアダムがやってくれるので、こちらは先ほどのようにスゲジュールのチェックだけをしていればいいのだが。

まったく便利な世の中になったものだ。

コンピュータに小説が書けるのか、と昔の人なら思うのかもしれない。だが、もともと頭が良かった上に考えることまで覚えてしまったのだ。その感覚はとうてい人間の考えの及ぶところではない。そして彼らは、人間の作家では思いつかないような突拍子もないことを、ほんのわずかな時間で完成させてしまうのだ。それも人間の作家よりもはるかに安い原稿料で。

ただのマネージャーのように見える私の仕事も、実際はかなり大変だ。

第一に彼らの教育である。理屈ばかりご立派で、与えられたプログラムに従って計算するしか能のなかった連中にものを教え込み、ましてやそれが小説なんぞを書くようになるまでには、それこそ筆舌につくしがたい苦労があった。

パートナーを教育することこそが我々作家の仕事であり、その仕上がり具合で作家としての力量が問われてしまうのだから。一流の作家イコール、一流のプログラマーというのがこの業界での常識でもあるのだ。

極端なことを言ってしまうえば、今時人間の書いたものなんて誰も読みやしない。現在売れている有名な作家達は、皆自分のコンピュータに書かせている。さつき買ってきたあの本だってそうだ。

それに、アダムのおかげで、ようやく私も中堅作家として認められてきた。

まさにコンピュータさまさまである。

作家だけではない。アダムのような高性能なコンピュータが普及価格帯で市場に出回っている現在、彼らは人間達のもっとも身近なパートナーとしてあらゆる場面で活躍し続けている。人間達により豊かな生活を提供するために。

とは言え、先ほどのように、使われるフリをしながら相手を使う、という高等な駆け引きができるのは、まだまだ人間だけだ。どんなに時代が変わっても、それを利用するモノのための便利なツール、という図式はくつがえりはしない。

しかし……

「しかしねえ」

私はさっきのブックカードをもう一台の旧世代コンピュータにかけ、その画面を眺めながらアダムに言った。

「一体こんなもののどこが面白いんだい。僕には難しすぎて、さっぱりわからないんだけどねえ」

その通りだった。画面に出たそれらは、様々な記号やわけのわからない言葉の羅列で、本当にこれがベストセラーであって、また実際にこれを読む人がいるのだろうかと思わせるようなシロモノだったのだから。

すると、それまでキー音をカシャカシャ言わせていたアダムの動きがピタリと止まり、フフフと笑ってから面白そうに彼が言った。

「わかるわけがないさ、人間にこの面白さが……」

（後書き）

ワープロ全盛時代に書き下ろしたものです。わずか十年やらで、世の中がこんなに変わってしまうとは、この時は思いもしませんでした。

ちなみに当時、ワープロを一生使えるツールだと信じ、インクリボンや感熱紙をめっちゃ買いだめしてあります……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3673f/>

コンピュータさまさま……

2010年10月8日15時51分発行